

本会が初招聘しご家族とともに五年ぶりに来日

使命感あふれる李登輝元総統ご来日

常務理事・事務局長

柚原 正敬
ゆはら まさたか



出迎えの人々と握手（9月21日、東京駅）

◆本会招聘がようやく実現

去る九月十九日、李登輝元総統が二〇〇九年以来、五年ぶりに来日、関西国際空港に降り立たれた。総統を退任してから六度目の来日で、本会が初招聘し、六泊七日の充実した日程をこなして二十五日に無事帰台された。

常務理事の梅原克彦氏や李登輝先生来阪歓迎委員会の辻井正房委員長、蔡明耀・台北駐大阪経済文化弁事処長など、関係者とともに関空で一行をお迎えした。パッセンジャー・ボーディング・ブリッジ（搭乗橋）を先頭に立って歩かれてきた李登輝先生を目にし



曾文惠夫人と手をつないで関空に降り立たれた李登輝元総統（9月19日）
写真：浅岡敬史氏（以下同）

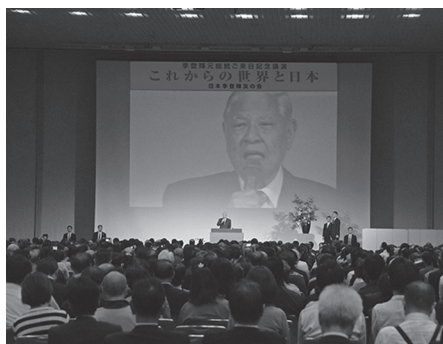
たときは思わず目頭が熱くなった。

本会は今これまで何度か李元総統を招聘したが、不調に終わっている。

実は、二〇〇九年初頭から「奥の細

道」の後半をたどっていたかどうか、本会招聘の来日計画を進め、政府の了承も得ていた。新潟、富山、石川、福井、岐阜など、すべての日程を整えたものの、来日まで半月に迫った五月中旬、体調を崩されて中止になった。

また、昨年五月にお招きしていたが、直前になって体調を崩されて中止になったことは未だ記憶に新しい。このときは代理の蔡焜燦先生も体調を崩して来日できなくなり、蔡先生から連絡いただいたときは頭が真っ白になった。そこで代理の代理として、春に叙勲された台湾高座会の李雪峰会長に来ていただいて何とか面目を保った。



大阪府立国際会議場で行われた講演会には1700名もの人々が駆けつけた（9月20日）

李登輝先生を日本に招聘するのは、

費用の面もさることながら、政府の重要人物として警備対象となっているため、警察庁や警視庁との警備会議が欠かせない。講演会場はもとより、発着予定の空港や駅、宿泊ホテル、訪問先など、立ち寄り先全ての下見が欠かせない。駐車場の確認や移動にかかる時間も調べなければならない。来日人数に応じた車輛の手配も行う。

それらを基に、「箱日程」というA4判一枚にまとめた詳細な行程表を作成

して警備会議に提出する。

李登輝先生の来日には、必ず日台の報道陣も同行してくる。訪問先などで一般の人々に迷惑がかからないよう、取材場所やテレビカメラの位置まで事前に決めておく必要がある。

そのため、八月末に四泊五日で李登輝基金会の二人の秘書が来日、一緒に大阪、東京、北海道の宿泊先や訪問先の下見を行った。北海道は北海道警が付いて下見をしたが、大阪と東京は日を改め、もう一度、大阪府警、警視庁と講演会場や新大阪駅、東京駅などを担当者に案内していただいて下見をしている。

李登輝先生の来日には、このような下準備が欠かせない。果たして今回はどうなるのだろうか、本当にハラハラしながら待っていた。

今年は体調も万全だと聞いてはいたものの、そのお姿をこの目で見るまではと思っていた。関空でそのお姿を確認したときは、よくぞ来ていただいた

という思いが込み上げてきた。二十五日に北海道の新千歳空港でお見送りしたときよりも深い安堵感を覚えた。

来日して下見をした同行秘書の一人も、出発する桃園空港に李登輝先生が見えられたときはホッとしたりと話していたが、心配は同じだった。

◆初めてご家族全員で来日

これまでの来日では、曾文恵夫人や令孫の李坤儀さんを同道されたことはあったが、今回は夫人とともに長女の李安娜さんと次女の李安妮さんも一緒に来た。ご家族全員で日本を訪問されるのは初めてのことで。

今回の来日では大阪と東京で講演していただいたが、その冒頭で娘さんたちを伴った理由について次のように明かし、参加者の穏やかな笑いを誘っている。

「日本へ行くことを決めたとき、娘たちから「これほど日本と縁の深い父親なのに、一緒に日本へ行ったことが一

度もない」ということで、九十一歳になって初めて娘たちを連れて日本へ参ったわけですね。

今回のご来日を前に、本会は八月十二日に都内で記者会見を開いている。この席上、李登輝先生と同じ大正十二(一九二二)年生まれの小田村四郎會長は「もうご高齢ですから、今回の来日が最後となるかもしれません」と説明したように、李先生もそう考えて連れてこられたのかもしれない。

総統退任後、初の来日となった二〇〇一年や二度目の二〇〇四年は、まだまだ中国からの圧力が強かった。二〇〇四年は、当時の王毅・中国大使が李先生を戦争メーカーとまで指弾、「その人物を日本に受け入れることは『一つの中国』政策に反する」と、当時の小泉内閣にビザを発給しないよう圧力をかけた。

それでも政府はビザを発給したものの、記者会見しない、講演しない、政治家と会わない、東京を訪問しないと

いう四つの条件を付けた。

しかし、二〇〇五年九月に台湾からの観光客がノービザになったことと相俟って、三度目の来日となった二〇〇七年、第一次安倍内閣のときからはそれらの条件が全て取り払われた。いかに影響力が強いと言っても、一人となつたのだから当然の措置だった。

それ以降、二〇〇八年九月の沖縄訪問や翌二〇〇九年九月の東京・高知・熊本ご訪問でも、中国からの圧力は影をひそめ、二〇〇七年までの緊張感はない。

李先生はそういう状況を察し、最後の訪日になるかもしれないとも考え、ご家族を伴って来日されたのだろう。確かに今回も、中国政府の報道官などが来日を非難することはなかった。外務省には中国からクレームが入ったそうだが、形ばかりだったという。

◆指導者としての使命感

大阪では「これからの世界と日本」



東京講演終了後、李登輝先生には秋田から駆けつけた旧知の「妙乃湯」女将の佐藤京子さんから花束が贈呈（9月21日、大手町サンケイプラザ）

と題して講演され、千七百人が駆けつけた。アメリカの一極支配が終わり、世界は「Gゼロ」という戦国時代に移りつつあると分析し、安倍内閣が閣議決定した集団的自衛権の行使容認を歓迎するとともに、日米同盟をより強固なものにする必要性を強調、日本の課題は憲法を改正して真の自立した国家となることだと提唱した。

東京講演は「人類と平和 アジアの平和を求めて」（看板は「これからの世界と日本」と題し、満堂の人々を前

に、「人間とはなにか」「平和とはなにか」まで言及、哲人政治家の本領を発揮された。参加者は、文字どおり獅子吼というにふさわしい音吐朗々と話す講演に聴き入っていた。

初日の公開記者会見で明らかにされたように、今回の来日目的は、世界最先端の癌治療法について専門家の話を聞き、代替エネルギーとしての太陽光発電所を視察し、肉牛飼育の現状を把握することにあった。この三つは、いずれも台湾より日本の方が先を行っていて、その技術を台湾で生かしたいとの思いからだった。

李登輝先生の新しい知識への関心は並大抵ではない。解説者や案内人に次々と質問を投げかけ、どこでも予定時間をオーバーした。

九月二十二日、神奈川県（つぎ）の浮島太陽光発電所を訪問された。東京電力の山口博副社長が解説したのだが、解説が終わるや否や、太陽光発電の出力変動やその制御方法、また経済性の将来

見通しや先行導入の意義など、立て続けに専門家並みの質問を投げかけ、副社長を戸惑わせる場面もあった。

翌九月二十三日、北海道千歳の苦楽園・亀田牧場に肉牛飼育を視察されたときも同様だつた。解説した牧場主公子息の亀田泰貴氏に、牛の育て方はこちらん、肥料や尿処理方法など細かいことまで尋ねられている。

そこに、台湾をより豊かにするため日本との絆を深めたいという、李登輝先生の指導者としての使命感を見た



北海道の亀田牧場視察のとき、香り豊かな絞立ての牛乳が振る舞われ、報道陣が李安娜さん（右）と李安娜姫さんに感想を求めた（9月23日）

のは私ばかりではない。同行した交流協会の小松道彦・総務部長や梅原克彦・常務理事、杉本拓朗・青年部長も同様の感想を抱いている。

よく知られているように、李登輝先生は哲学的思索の果てにたどり着いた境地について「我是不是我的我（私は私でない私）」と表現されている。李先生ご自身も夏目漱石の「則天去私」にも例えられるように、私を超えた無私の境地を指すと言える。その境地を目の当たりにした今回の来日だつた。

なお、今回ご来日の記録を単行本として出版すべく取り組んでいる。出版は来年二月の予定で、李登輝先生の講演録はもちろん、台湾側は李安娜さんや李安娜姫さん、王燕軍・李登輝基金会秘書長など、日本側は渡辺利夫・拓大総長や葛西敬之・JR東海名誉会長、江口克彦・参院議員など約四十名が寄稿、カメラマンの浅岡敬史氏が撮影した写真をふんだんに使用する予定だ。楽しみにお待ちいただきたい。